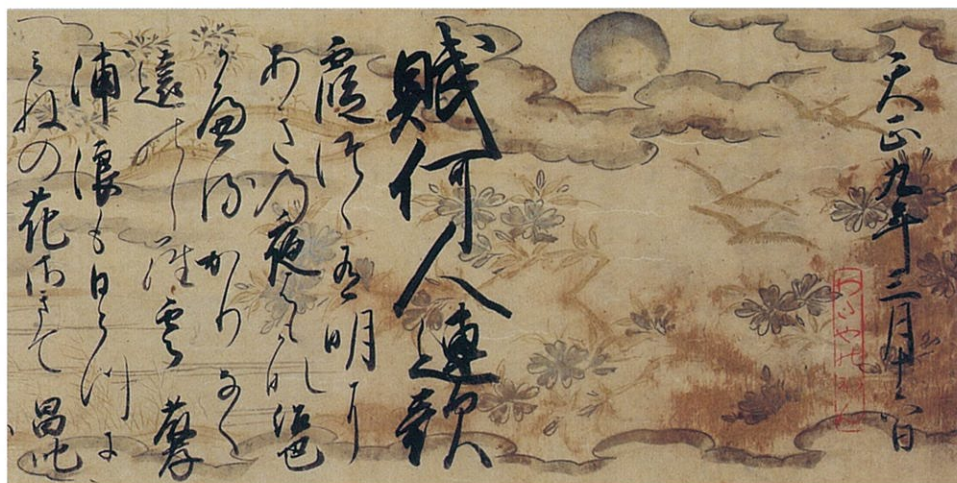


やまとの名品 天理図書館



ふ なにひとれん が ひゃくいん
賦何人連歌百韻

藤孝(細川幽斎)筆
天正9(1581)年
縦17.5cm 横488.5cm

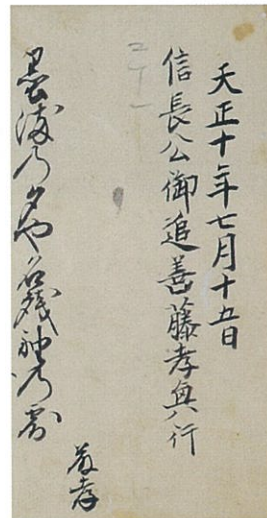
細川幽齋ほそかわゆうさいという名前をご存じでしょうか。戦国時代の武将で、織田信長に仕えていた人です。幽齋は武将としてだけでなく、文化人としても有名で、当時の連歌作品も多数残されています。連歌とは、和歌の上の句と下の句を、それぞれ別の人が詠み連ねていくものです。そうして出来た百句の連歌を百韻ひゃくいんといいます。

掲出資料は、この連歌に参加した幽齋が書いたものです。脇句わき（二番目の句）の作者藤孝ふじかかが幽齋で、彼は藤孝のほか、玄旨げんしとも称しました。発句はつく（最初の句）の作者紹巴しゅうはは、有名な連歌師です。明智光秀が「時は今

あめが下しる 五月さつきかな」と詠み、信長を討つことを願ったと言われている「愛宕百韻あたごひゃくいん」という連歌にも、紹巴は参加していました。

光秀の娘は幽齋の息子に嫁いでおり、幽齋と光秀の仲は良好でした。二人が共に参加した連歌も残っています。しかし本能寺の変が起こると、幽齋は信長を討つた光秀の誘いを断り、出家して息子に家督を譲ります。

そんな幽齋が、光秀の亡くなった山崎の戦い後に信長を偲んで催したといわれているのが「信長公御追善百韻のぶながこうごいぜんひゃくいん」です（挿



図参照)。ここにも紹巴は参加しています。光秀と交流があったことから当時立場の危うかったであろう二人がこの連歌会を催したのは、本心か保身か、定かではありません。ですが、そこには想像をかきたてるロマンがあります。連歌は単に句を連ねただけのものではなく、当時の人たちの交流や思惑も知ることの出来る資料なのです。

（天理図書館 池合 礼）